

●二人で味わう古典和歌(46)

筑波嶺に 廬りて 妻なしに 我が寝む夜ろは はやも明けぬかも 作者未詳

『常陸国風土記』収載の歌謡、筑波山での歌垣にまつわる二首のうちの一。歌意は「筑波山に泊まって、妻も得られずに独りわが寝る夜は早く明けてしまってくれよ」。この歌に先立つ一首はこんな歌。

筑波嶺に 逢はむと 言ひし子は 誰が言聞けば 神嶺逢はずけむ

「筑波山で逢おうね、と約束したあの子は他の男の言うことを聞いたのか逢えなかったよ」。どちらも相手を得られなかった男の嘆きの歌。しかし、実は〈誘い歌〉であるという。歌垣にこれから参加する男たちがあえて嘆きの歌を大声で歌うことで同じく参加する女たちの気を引くためのパフォーマンスであったとか。が、それにしてはリズムがぎこちない(二首どちらも字足らず)。

そう思つて調べていくと、いろいろと面白いことがわか



つてきた。そもそも歌垣(東国では「嬬歌」というのは、春の農耕予祝行事であり、のちには秋にも行われ、飲食、舞踏、歌の掛け合いなどをし求婚の場でもあった。このような行事では性的開放も行われたらしく、子孫の繁栄をもたらす性的行為は五穀豊穡の思いにも繋がり、盛んであるほど豊かな稔りもたらされると信じられた。

なかでも筑波山の歌垣は破格のスケールであつたらしい。箱根の足柄の坂から一七〇キロを越えて東の地域の人々が集まったのだから、ことによると一万人規模だったのではという説もある。ちょうど農閑期にあたる時期で、場合によつては一週間以上の食糧や着替えを持つてきたとも考えられる。歌を掛け合つて意気投合した男女は、別れに贈り物を交換し、それは婚約の記念であつた可能性がある。

「筑波山の歌垣の会で、贈り物をもらえない息子や娘は、子どもとして認めない」という諺があるほど。親が気を揉んだのは今も昔も同じだ。

そんな背景を知つてみると冒頭の二首からは、健やかでかつ切実な歌声が聞こえてくる。(小島なお)